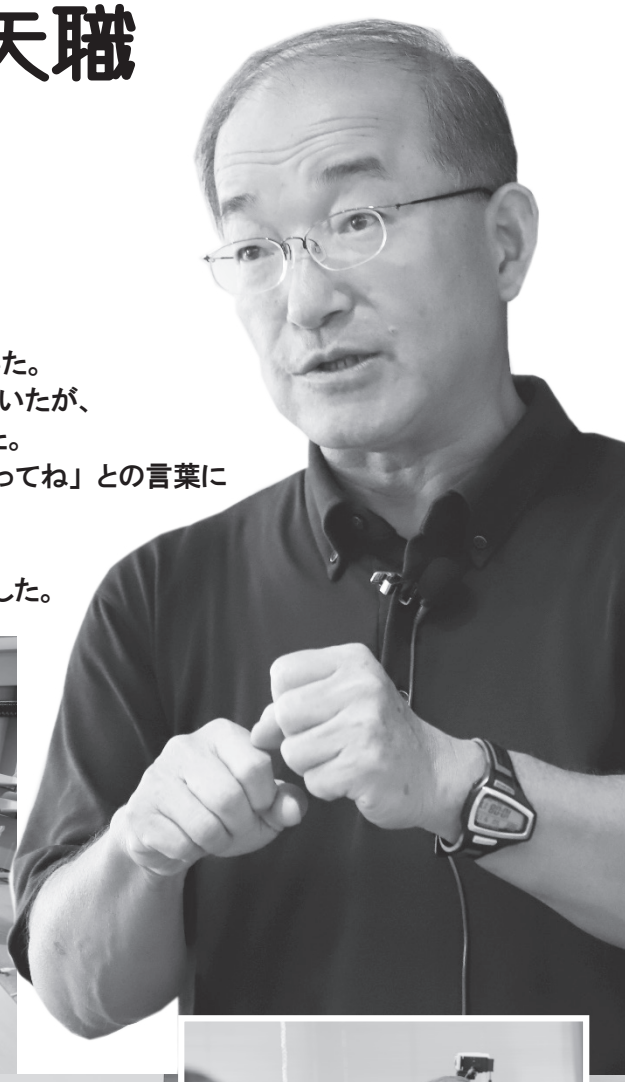
トラウマが生んだ天職

昌子　誠（しょうじ　まこと）

島根県



昌子さんの少年期の思い出話を聞いた。

中学1年生の時、同じクラスに難聴の少年がいた。
彼は意思疎通が図りにくいのか、いつもイライラしていた。
ひとつの趣味が共通していたことがあってよく交流していたが、
行き違いも多く、次第に距離を置く存在になっていった。
学年が変わる時クラス担任から「また、仲良くしてやってね」との言葉に
NOと返したことが今もトラウマになっている。
障害が生んだかもしれない小さな行き違いで、
友達関係を切り捨ててしまったのではないか、と反省した。

リモート研修会「ヤングケアラーを知ろう」を話し合う全通研島根県支部運営メンバー

その後、県庁職員として勤める課の選択も、障害・貧困・困難を持つ人たちへの福祉・保健の方向へと向かっていった。「人と人の心を繋ぎ合う難しさ」「広く円滑なコミュニケーションができる重要性」を、自らも右耳に聴覚障害のある昌子さんは我が身としても感じたため、手話サークルに参加し、活動に力を注いだ。

定年退職後、「無職」になるのも何か癪に障るから、先代からの「農業」を趣味として引き継いだ。
人と人を繋ぐ天職より農業は結果が出やすいのでストレスは少ないそうだ。
そう話しながら、青空に晴れ晴れとした笑顔が印象的だった。

気ごころの知れたろう者との談笑に花が咲く
（左から　正司教通さん・昌子　誠さん・井上　隆連盟長）

福祉団体の理事や評議員、全通研島根支部長も務め、昨年より民生・児童委員も拝命した。人と人を繋ぐ天職は、これからも続いていく。

島根の食は日本海の味や汽水湖の宍道湖七珍と言われる多くの個性的な魅力を持つが人にも溢れる優しさを持つ魅力的で尊敬できる味があった。

写真／文　松本　博